

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

| リスクの程度 の評価 | A 薬理作用 | B 相互作用 | | C 重篤な副作用のおそれ | | C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | D 濫用のおそれ | E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ) | F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ) | G 使用方法(誤使用のおそれ) | | | H スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | | |
|---------------|------------|------------------------------|---|-------------------|----------------------|---|------------------|---------------------------------------|---------------------------|--|-------------------|---------------------------------|---|---|--|
| | | 薬理作用 | 相互作用 | 重篤な副作用のおそれ | 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | | | | 薬理に基づき | 適応禁忌 | 慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ) | | | |
| 評価の視点 | 薬理作用 | 併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ) | 併用注意 | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | 薬理に基づく習慣性 | 適応禁忌 | 慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ) | 症状の悪化 につながるおそれ | 適応対象の 症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ) | 使用方法(誤使用のおそれ) | 用法用量 | 効能効果 |
| 局所麻酔成分 | アミノ安息香酸エチル | アミノ安息香酸エチル「丸石」(内用・外用) | 胃粘膜の知覚神経末端を麻痺させ、中枢への刺激伝達を遮断して疼痛、嘔吐を鎮める。 | | | 0.1~5%(食欲不振、悪心、口渇、便秘)、0.1%未満(下痢、メトヘモグロビン血症(小児)) | 頻度不明(過敏症) | | 本剤過敏症既往歴 乳幼児(内用・坐剤の場合) | 高齢者、妊婦又は妊婦の可能性 | | | (内用) 口内にしびれ等を残さないため遅やかに飲み下す (外用) 腫には使用しないこと[軟膏・液剤の場合]、熱くして吸入しないこと[散布剤の場合] | (内用) 1日0.6~1g、3回分服。適宜増減。高齢者は減量 (外用) 通常、5~15%の軟膏剤、液剤、散布剤として、または、1冊中200mg~300mgを含有する坐剤として適宜患部に使用する | (内用) 下記疾患に伴う疼痛・嘔吐：胃炎、胃潰瘍 (外用) 下記疾患における顔面・頸部：外傷、熱傷、日焼け、皮膚潰瘍、褥瘡症、痔疾 |
| 局所麻酔成分 | 塩酸ジブカイン | ベルカミン注射液に類似のため使用 | 感覚・求心神経線維のNa ⁺ チャネルを遮断することにより局所麻酔作用を発現する。効力、持続性、毒性いずれも最大級の局所麻酔薬であるが、より効力を強めるために局所鎮痛以外の目的にはエピネフリンを添加して用いる | 痙攣、虚脱等の中毒症状(頻度不明) | ショック(頻度不明) | 頻度不明(眠気、不安、興奮、霧視、眩暈、悪心・嘔吐等) | 頻度不明(過敏症) | | 本剤に対し過敏症の既往歴 | 本人又は両親、兄弟に気管支喘息、発疹、荨麻疹等のアレルギー反応を起こしやすい体質、高齢者、妊婦又は妊婦している可能性のある婦人。 | | | 使用に際し、目的濃度の水性注射液または水性液として使用する。 ただし、年齢、麻酔領域、部位、組織、症状、体質により適宜増減する。 仙骨麻酔 0.05~0.1%注射液にエピネフリンを添加したものを、塩酸ジブカインとして、通常成人10~30mgを使用する。 (基準最高用量：1回40mg) 0.05~0.1%注射液にエピネフリンを添加したものを、塩酸ジブカインとして、通常成人3~40mgを使用する。 (基準最高用量：1回40mg) 0.05~0.1%注射液にエピネフリンを添加したものを、塩酸ジブカインとして、通常成人1~40mgを使用する。 表面麻酔 ・耳鼻咽喉科領域の粘膜麻酔には、1~2%液にエピネフリンを添加したものを、塩酸ジブカインとして、通常成人には1~5滴を点眼する。 ・尿道粘膜麻酔には、 | 仙骨麻酔、伝導麻酔、浸潤麻酔、表面麻酔、歯科領域における伝導麻酔・浸潤麻酔 | |

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

| リスクの程度 の評価 | A 薬理作用 | B 相互作用 | | C 重篤な副作用のおそれ | | C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ | | D 並用のお それ | E 患者背景(既往歴、治療状況等、 重篤な副作用につながるおそれ) | F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ) | | G 使用方法(誤使用のおそれ) | | | H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化 | | | | | |
|---------------|--------|--|------|-----------------|--------------------------|-----------------------------|--------------------------|---------------|--------------------------------------|----------------------------|-------------------------------------|-----------------------|---|---------------|--------------------------------|-------------------------|------------------------------|---------------------------|--|--|
| | | 併用禁忌(他 剤との併用により 重大な問題が発生 するおそれ) | 併用注意 | 薬理・毒性に 基づくもの | 特異体質・ア レルギー等 によるもの | 薬理・毒性に 基づくもの | 特異体質・ア レルギー等 によるもの | | | 適応禁忌 | 慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ) | 症状の悪化 につながるお それ | 適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 限るおそれ) | 使用方法(誤使用のおそれ) | | | | 使用量以上 過量使用・誤使 用のおそれ | 長期使用に よる健康被 害のおそれ | |
| 評価の視点 | 薬理作用 | 相互作用 | | 重篤な副作用のおそれ | | 重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ | | 薬理に基づく 習慣性 | | 適応禁忌 | 慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ) | 症状の悪化 につながるお それ | 適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 限るおそれ) | 使用方法(誤使用のおそれ) | 使用量以上 過量使用・誤使 用のおそれ | 長期使用に よる健康被 害のおそれ | スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化 | 用法用量 | 効能効果 | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0.1%液にエビネフリンを添 加したものを、塩酸ジ ブカインとして、通常成人 男子10~20mg、女子3~ 7mgを使用する。 ・膀胱粘膜麻酔には、 0.025~0.05%液にエビネ フリンを添加したものを 用い、塩酸ジブカインと して、通常成人10~20mg を使用する。 ・局所鎮痛には、0.025~ 0.05%液を用い、適量 を使用する。 ・歯科領域麻酔 0.1%注射液にエビネフ リンを添加したものを 用い、伝達麻酔・浸潤麻 酔には塩酸ジブカインと して、通常成人1~2mg を使用する。 | |

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

| リスクの程度 の評価 | A 薬理作用 | | B 相互作用 | | C 重篤な副作用のおそれ | | C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ | D 適用のお それ | E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ) | F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ) | G 使用方法(誤使用のおそれ) | H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化 | 評価の視点 | 薬理作用 | 相互作用 | 重篤な副作用のおそれ | 重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ | 薬理に基づく 留意性 | 適応禁忌 | 慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ) | 症状の悪化 につながるお それ | 適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ) | 使用方法(誤使用のおそれ) | スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化 | 用法用量 | 効能効果 | | | |
|---------------|---------|---------------------------|--|--|--------------|---------------------|-----------------------------|--|---------------------------------------|----------------------------|-----------------|--------------------------------|-------|------|------|------------|--------------------------|--|---|---------------------------------|-----------------------|---|---------------|--------------------------|------|------|--|--|--|
| | | 薬理作用 | 相互作用 | 併用禁忌(他 剤との併用によ り重大な問題 が発生するお それ) | 併用注意 | 薬理・毒性に 基づくもの | 特異体質・ア レルギー等 によるもの | 薬理・毒性に 基づくもの | 特異体質・ア レルギー等 によるもの | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 局所麻酔成分 | 塩酸プロカイン | 塩酸プロカイン注「ホエイ」局所麻酔に類似のため使用 | 合成局所麻酔薬の原型であり、感覚・求心神経線維のNa ⁺ チャネルを遮断し、活動電位の伝導を抑制することにより局所麻酔作用を発現する。粘膜への浸透性が深いので表面麻酔としては無効である。代謝産物が血管拡張作用を有し、速やかに吸収されるのでエピネフリンの添加が必要である。 | | | 痲せん、痲れん等の中毒症状(頻度不明) | ショック(頻度不明) | 頻度不明(むむけ、不安、興奮、霧視、めまい、悪心・嘔吐、メヘモグロビン血症) | 頻度不明(過敏症) | | | | | | | | | 重篤な出血やショック状態(脊椎、硬膜外麻酔時:症状が悪化)、注射部位またはその周辺に炎症(脊椎、硬膜外麻酔時:効果が急速に発現)、敗血症の患者(脊椎、硬膜外麻酔時:敗血症性の髄膜炎がおこるおそれ)、メヘモグロビン血症(脊椎麻酔を除く)(症状が悪化するおそれ)、本剤または安息香酸エステル(コカインを除く)系局所麻酔薬に対し過敏症の既往歴 | 高齢者、妊婦または妊婦している可能性のある婦人、妊娠末期の婦人 | | | | | | | | | 使用に際し、目的濃度の水性注射液として使用する。脊椎麻酔(腰椎麻酔) 5~10%注射液とし、通常、成人には塩酸プロカインとして、低位麻酔には50~100mg、高位麻酔には150~200mgを使用する。硬膜外麻酔 (基準最高用量:1回600mg) 1.5~2%注射液とし、通常、成人には塩酸プロカインとして、200~400mgを使用する。1~2%注射液とし、通常、成人には塩酸プロカインとして、10~400mgを使用する。浸潤麻酔 (基準最高用量:1回1,000mg) 0.25~0.5%注射液とし、通常、成人には塩酸プロカインとして、1回1,000mgの範囲内で使用する。歯科領域麻酔 2%注射液にエピネフリンを添加したものをを用い、伝達麻酔、浸潤麻酔には、通常、成人には塩酸プロカインとして、10~100mgを使用する。ただし、年齢、麻酔領域、部位、組織、症状、体質により適宜増減する。必要に応じエピネフリン(通常濃度1:10万~20万)を添加して使用する。 | 脊椎麻酔(腰椎麻酔)、硬膜外麻酔、伝達麻酔、浸潤麻酔、歯科領域における伝達麻酔、浸潤麻酔 |
| | リドカイン | キシロカイン液「4%」表面麻酔に類似のため使用 | 神経膜のナトリウムチャネルをブロックし、神経における活動電位の伝導を可逆的に抑制し、知覚神経及び運動神経を遮断する局所麻酔薬である。表面・浸潤・伝達麻酔効果は、塩酸プロカインよりも強く、作用持続時間は塩酸プロカインよりも長い。 | | | 意識障害、痲痺、痲痺(頻度不明) | ショック(頻度不明) | 頻度不明(眩暈、不安、興奮、霧視、眩暈、悪心・嘔吐) | 頻度不明(過敏症) | | | | | | | | | 本剤の成分又はアミド型局所麻酔薬に対し過敏症の既往歴。 | 高齢者又は全身状態が不良。心刺激伝導障害。重症の肝機能障害又は腎機能障害。幼児。妊婦又は妊婦している可能性のある婦人。 | | | | | | | | | 塩酸リドカインとして、通常成人では80~200mg(2~5mL)を使用する。なお、年齢、麻酔領域、部位、組織、体質により適宜増減する。幼児(特に3歳以下)では低用量から投与を開始。 | 表面麻酔 |

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

| リスクの程度 の評価 | A 薬理作用 | B 相互作用 | C 重篤な副作用のおそれ | C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | D 濫用のおそれ | E 患者背景(既往歴・治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ) | F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ) | G 使用方法(誤使用のおそれ) | H スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | I スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | J 用法用量 | K 効能効果 | | |
|---------------|------------------|--|---|--|--|--|--|-----------------|---|--|--|--|--|--|
| | | | | | | | | | | | | | 薬理作用 | 相互作用 |
| 抗炎症成分 | 塩化リゾチーム レフトゼ錠 | 抗炎症作用: 痲疹形成・組織修復作用: 膿粘液の分解と排出作用: 出血抑制作用 | | ショック、アナフィラキシー様症状・SJ症候群・Lylei症候群(頻度不明) | 0.1~5%未満(下痢、胃部不快感、悪心・嘔吐、食欲不振)、 0.1%未満(口内炎等)、 頻度不明(肝機能障害 (AST(GOT)、ALT(GPT)、 Al-P、 γ -GTP、LDHの上昇等、めまい) | | 本剤の成分過敏症の既往歴、卵白アレルギー(アナフィラキシー・ショックを含む過敏症状) | | | 作用機序は解明されていない点も多く、用量・効果の関係も必ずしも明らかでない。薬然と投与しない。 | | 慢性副鼻腔炎の腫脹の緩解、痲疹の切れが悪く、嚥出回数が多い気管支炎、気管支拡張症の嚥出困難、小手術時の術中術後出血の場合、通常、成人は1日塩化リゾチームとして、60~270mg(力価)を3回に分けて経口投与する。2.歯槽膿漏症(炎症型)腫脹の緩解の場合、通常、成人は1日塩化リゾチームとして、180~270mg(力価)を3回に分けて経口投与する。高齢者減量 | 慢性副鼻腔炎の腫脹の緩解、痲疹の切れが悪く、嚥出回数が多い気管支炎、気管支拡張症の嚥出困難、小手術時の術中術後出血(歯科、泌尿器科領域)の場合、2.歯槽膿漏症(炎症型)腫脹の緩解の場合 | |
| | グリチルリチン酸 | 軟膏のみなので、グリチルリチン酸モノアンモニウム(グリチロン注一号)を使用 | 抗炎症作用 | ループ利尿剤・チアジド系およびその類似降圧利尿剤(低カリウム血症)、甘草(偽アルドステロン症) | 偽アルドステロン症(頻度不明)、糖質分解症(グリチルリチン酸または甘草を含む有する製剤) | | 偽アルドステロン症、ミオパシー、低カリウム血症(低カリウム血症、高血圧症等を悪化) | | | 高齢者、妊婦小児等 | 長期運用により偽アルドステロン症 | グリチルリチンとして、通常成人1日1回40mgを皮下注射する。なお、年齢、症状により適宜増減する。 | 薬疹 | |
| 抗炎症成分 | 酢酸ヒドロコルチゾン | コトリル錠 外用痔疾用薬なのでヒドロコルチゾンの内服で代用 | 抗炎症・抗アレルギー作用を示す糖質副腎皮質ホルモンである。副腎摘出ラットの肝に対する本薬の糖原増加作用はコルチゾンの約1.5倍であり、ラット横断肉芽腫に対する抗炎症作用はコルチゾンの約1.3倍である。 ヒドロコルチゾンの糖質副腎皮質ホルモンとしての作用は弱く、副腎摘出イヌに対する生命維持作用はデオキシコルチコステロンの約0.04倍である。 | バルビツール酸誘導体・フェニトイン・リファンピシン(代謝が促進されることにより本剤の作用が減弱)、サリチル酸誘導体(これらの薬剤との併用時に本剤を減量すると血清中のサリチル酸誘導体の濃度が増加し、サリチル酸中毒)、抗凝血剤(これらの薬剤の作用を減弱)、経口糖尿病薬用剤(これらの薬剤の作用を減弱)、利尿剤(カリウム保持性利尿剤を除く)(低カリウム血症) | 感染症、機能的副腎皮質機能不全、糖尿病、消化性潰瘍、骨粗鬆症、大腸炎及び上腕骨等の骨頭無菌性壊死、ミオパシー、 脳内腫、後遺白内障、血栓症(頻度不明) | 頻度不明(月経異常、肺炎、下痢、悪心・嘔吐、胃痛、胸やけ、腹部膨満感、口渇、食欲亢進、精神変調、うつ状態、多幸症、不眠、頭痛、眩暈、腰痛、筋肉痛、満月様顔貌、野牛肩、窒素負平衡、脂肪肝、浮腫、血圧上昇、低カリウム性アルカローシス、中心性漿液性網脈絡膜症等による網膜障害、眼球突出、白血球増多、ざ瘡、多毛、色素沈着、皮下滋 | 頻度不明(過敏症) | | 本剤の成分に対し過敏症の既往歴原則禁忌 有効な抗菌剤の存在しない感染症、全身的真菌症、結核性疾患、単純疱疹性角膜炎(感染症を増悪させるおそれ)、消化性潰瘍(潰瘍を増悪させるおそれ)、精神病(精神病を増悪させるおそれ)、後遺白内障の患者(白内障を増悪)、緑内障(眼圧を上昇)、高血圧(血圧を上昇)、腎臓異常(低カリウム血症等)、血栓症(血栓症を増悪させるおそれ)、最近行った内臓の手術(創傷治癒を障害させるおそれ)、急性心筋梗塞(心破裂) | 水痘又は麻疹の既往歴のない患者においては、水痘又は麻疹への感染を極力防ぐよう常に十分な配慮と観察を行うこと。 | 運用後、投与を急に中止すると、ときに離脱症状があらわれることがあるので、徐々に減量するなど慎重に行なうこと。 | 高齢者への長期投与・感染症の誘発、糖尿病、骨粗鬆症、高血圧症、後遺白内障、緑内障等の副作用発現。 小児への長期投与・頭蓋内圧亢進症状 | 通常、成人にはヒドロコルチゾンとして1日10~120mgを1~4回に分けて経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。 | 1.慢性副腎皮質機能不全(原発性、続発性、下垂体性、医原性)、急性副腎皮質機能不全(副腎クラーゼ)、副腎性器症候群、亜急性甲状腺炎、甲状腺疾患に伴う悪性眼球突出症、ACTH単独欠損症 2.慢性関節リウマチ(ステロイドを含む)、リウマチ熱(リウマチ性心炎を含む) 3.エリテマトーデス(全身性及び慢性円板状)、全身性血管炎(大動脈炎症候群、結節性動脈周囲 |

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

| リスクの程度 の評価 | A 薬理作用 | B 相互作用 | | C 重篤な副作用のおそれ | | C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ | D 濫用のお それ | E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ) | F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ) | | G 使用方法(誤使用のおそれ) | | | H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化 | 用法用量 | 効能効果 |
|---------------|--------|--|------|-----------------|--------------------------|-----------------------------|--------------------------|---------------------------------------|----------------------------|---|-----------------|-----------------|------------------|--------------------------------|------|---|
| | | 薬理作用 | 相互作用 | 重篤な副作用のおそれ | 重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ | 薬理に基づく 習慣性 | 濫用禁忌 | 慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ) | 症状の悪化 につながるお それ | 適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ) | 使用方法(誤使用のおそれ) | 使用量上 制限があるもの | 適量使用・誤使 用のおそれ | 長期使用に よる健康被害 のおそれ | | |
| | | 併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ) | 併用注意 | 薬理・毒性に 基づくもの | 特異体質・ア レルギー等 によるもの | 薬理・毒性に 基づくもの | 特異体質・ア レルギー等 によるもの | | | | | | | | | 炎、多発性動脈炎、ヴェゲナ肉芽腫症を含む)、多発性筋炎(皮膚筋炎)、強皮症 4.ネフローゼ及びネフローゼ症候群 5.気管支喘息、薬剤その他の化学物質によるアレルギー・中毒(薬疹、中毒疹を含む)、血清病 6.重症感染症(化学療法と併用する) 7.溶血性貧血(免疫性又は免疫性機序の疑われるもの)、白血病(急性白血病、慢性骨髄性白血病の急性転化、慢性リンパ性白血病)(皮膚白血病を含む)、顆粒球減少症(本態性、続発性)、紫斑病(血小板減少性及び血小板非減少性)、再生不良性貧血 8.限局性膀胱炎、潰瘍性大 |

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

| リスクの程度 の評価 | A 薬理作用 | B 相互作用 | | C 重篤な副作用のおそれ | | C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | D 濫用のおそれ | E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ) | F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ) | | G 使用方法(誤使用のおそれ) | | | H スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | I スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | 用法用量 | 効能効果 |
|---------------|--------|--------|------|------------------------------|------|-------------------------|----------------------|-----------------|---------------------------------------|------------------------|------|-------------------------|---------------|-----------------------------|--------------------|--------------------|------|--|
| | | 薬理作用 | 相互作用 | 併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ) | 併用注意 | 重篤な副作用のおそれ | 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | | 薬理に基づく習慣性 | 適応禁忌 | 慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ) | 症状の悪化につながるおそれ | 適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ) | | | | |
| | | | | | | 薬理・薬性に 基づくもの | 特異体質・アレルギー等 によるもの | 薬理・毒性に 基づくもの | 特異体質・アレルギー等 によるもの | | | | | | | | | 腸炎 9.重症消耗性 疾患の全身状 態の改善(稀 末期、スプ ルーを含む) 10.慢性肝炎 (活動型、急性 再燃型、胆汁 うっ滞型)(但 し、一般的治 療に反応せず 肝機能の著し い異常が持続 する難治性の ものに限る)、 肝硬変(活動 型、難治性腹 水を伴うもの、 胆汁うっ滞を 伴うもの) 11.サルコイ ドーシス(但 し、両側肺門リ ンパ筋腫脹の みの場合を除 く) 12.肺結核(粟 粒結核、重症 結核に限る) (抗結核剤と併 用する)、結核 性胸膜炎(抗 結核剤と併用 する)、結核性 腹膜炎(抗結 核剤と併用す る)、結核性心 のう炎(抗結核 剤と併用する) |

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

| リスクの程度 の評価 | A 薬理作用 | B 相互作用 | | C 重篤な副作用のおそれ | | C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ | | D 濫用のお それ | E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ) | | F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ) | | G 使用方法(誤使用のおそれ) | | | H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化 | | |
|---------------|--------|--|------|-----------------|--------------------------|-----------------------------|--------------------------|---------------|---------------------------------------|-------------------------------------|----------------------------|---|---------------------------|-------------------------|--|--------------------------------|------|--|
| 評価の視点 | 薬理作用 | 相互作用 | | 重篤な副作用のおそれ | | 重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ | | 薬理に基づく 習慣性 | 適応禁忌 | 慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ) | 症状の悪化 につながるお それ | 適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ) | 使用方法(誤使用のおそれ) | | | スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化 | 用法用量 | 効能効果 |
| | | 併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ) | 併用注意 | 薬理・毒性に 基づくもの | 特異体質・ア レルギー等 によるもの | 薬理・毒性に 基づくもの | 特異体質・ア レルギー等 によるもの | | | | | | 使用量以上 過量使用・誤使 用のおそれ | 長期使用に よる健康被害 のおそれ | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | 13.脳脊髄炎 (脳炎、脊髄炎 を含む)(但し、 一次性脳炎の 場合は頭蓋内 圧亢進症状が みられ、かつ 他剤で効果が 不十分なとき に短期間用い ること)、末梢 神経炎(ギラン バレー症候群 を含む)、筋強 直症、多発性 硬化症(視束 脊髄炎を含 む)、小舞強 痙、顔面神経 麻痺、脊髄炎 網膜炎 14.悪性リンパ 腫(リンパ肉腫 症、細網肉腫 症、ホジキン 病、皮膚細網 症、嚢状息肉 症)及び類似 疾患(近縁疾 患)、好酸性肉 芽腫、乳癌の 再発転移 15.特異性低血 糖症 16.原因不明の 発熱 17.副腎摘除、 副腎皮質機能 不全患者に対 する外科的硬 膜 18.蛇毒・昆虫 毒(重症の虫さ されを含む) 19.尿管整形術 後の組織防止 20.★湿疹・皮 膚炎群(急性 湿疹、亜急性 湿疹、慢性湿 疹、接触皮膚 炎、貨幣状湿 疹、自家感作 性皮膚炎、アト ピー皮膚炎、 乳・幼・小児湿 疹) 21.内服・視神経 22.急性・慢性中 23.難治性口内 ★印の附されて |

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

| リスクの程度 の評価 | A 薬理作用 | B 相互作用 | C 重篤な副作用のおそれ | | C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | D 薬用のおそれ | E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ) | F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ) | G 使用方法(薬使用のおそれ) | H スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | | | | |
|---------------|--|--|--|---|-------------------------|---|---------------------------------------|--|--|--|--|--|--|--------------|
| 評価の視点 | 薬理作用 | 相互作用 | 重篤な副作用のおそれ | | 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | 薬理に基づく留意性 | 清浄禁忌 | 慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ) | 症状の悪化につながるおそれ | 適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ) | 使用方法(薬使用のおそれ) | スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | 用法用量 | 効能効果 |
| | | 併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ) | 併用注意 | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | | | | | | 使用量に上 過量使用・誤使用 があるもの | 長期使用による健康被害のおそれ | | |
| 抗炎症成分 | 酢酸プレドニゾン プレドネマ注腸20mg(酢酸プレドニロンがないためリン酸プレドニゾンで代用) | ラットの腹膜炎酢酸注入潰瘍性大腸炎モデルに対し、リン酸プレドニゾン0.3mg/kg、0.1mg/kgの注腸投与にて有意な潰瘍面の縮小効果が認められた | バルビツール酸誘導体(フェニバルビタール)・フェニトイン・リファンピシン(本剤の作用が減弱)、サリチル酸誘導体(併用時に本剤を減量すると、血清中のサリチル酸誘導体の濃度が増加し、サリチル酸中毒)、抗凝血剤(抗凝血剤の作用を減弱)、経口糖尿病用剤・インスリン製剤(これらの薬剤の作用を減弱)、利尿剤(カリウム保持性利尿剤を除く)(併用により、低カリウム血症)、活性型ビタミンD3製剤(高カルシウム尿症、尿路結石があらわれる)、シクロスポリン(副腎皮質ホルモン剤の大量投与により、併用したシクロスポリンの血中濃度が上昇)、マクロライド系抗生物質(副腎皮質ホルモン剤で、作用が増強) | 誘発感染症、感染症の増悪、続発性副腎皮質機能不全、糖尿病、消化管潰瘍、消化管穿孔、消化管出血、肺炎、精神変調、うつ状態、虚脱、青組症、大腸骨及び上胸骨等の青頭無菌性壊死、ミオパシー、緑内障、後発白内障、液性網脈絡膜症、多発性後発部網膜色素上皮症、血栓症、心筋梗塞、脳梗塞、動脈瘤(頻度不明) | アナフィラキシー様反応、喘息発作(頻度不明) | 頻度不明(月経異常、下痢、悪心・嘔吐、胃痛、胸やけ、腹部膨満感、口渇、食欲不振、食飲不進、多幸症、不眠、頭痛、めまい、筋肉痛、関節痛、満月様顔貌、野牛肩、窒素負平衡、脂肪肝、浮腫、血圧上昇、低カリウム性アルカローシス、網膜障害、眼球突出、白血球増多、さ瘡、多毛、脱毛、色素沈着、皮下出血、紫斑、精索、そう痒、発汗異常、顔面紅斑、劇痛治療障害、皮膚非薄化・脆弱化、脂肪膜炎、発熱、疲労感、ステロイド腎症、体重増加、精子数及びその運動性の増減、尿路結石)、高齢者:長期投与時に感染症の誘発、糖尿病、青組症、高血圧症、後のう白内障、緑内障、小児:発育抑制、頭蓋内圧亢進症状や高血圧性脳症。神経障害-抗体反応の欠如(副腎皮質ホルモン剤を投与中の患者にワクチン(種痘等)を接種した場合)。 | | 禁忌:本剤の成分に対し過敏症の既往歴 原則禁忌 1.有効な抗菌剤の存在しない感染症(感染症が増悪するおそれ) 2.消化性潰瘍(消化性潰瘍が増悪するおそれ) 3.精神病(精神病が増悪するおそれ) 4.結核性疾患(結核性疾患が増悪するおそれ) 5.単純疱疹性角膜炎(単純疱疹性角膜炎が増悪するおそれ) 6.後発白内障(後発白内障が増悪するおそれ) 7.緑内障(緑内障が増悪するおそれ) 8.高血圧症(高血圧症が増悪するおそれ) 9.電解質異常(電解質異常が増悪するおそれ) 10.血栓症(血栓症が増悪するおそれ) 11.最近行った内臓の手術(創傷治療を遅延するおそれ) 12.急性心筋梗塞(心破裂) | 感染症、糖尿病、青組症、腎不全、甲状腺機能低下、肝硬変、脂肪肝、脂肪蓄積症、重症筋無力症、高齢者、薬物、食物、添加物等に過敏な喘息患者、妊婦又は妊婦している可能性のある婦人、授乳婦 | 水痘又は麻疹の既往のない患者においては、水痘又は麻疹への感染を予防しよう常に十分な配慮と観察を行うこと。 | 適量投与を急いで中止した場合:ときに発熱、頭痛、食欲不振、脱力感、筋肉痛、関節痛、ショック等の離脱症状。 | 高齢者に長期投与した場合:感染症の誘発、糖尿病、青組症、高血圧症、後発白内障、緑内障等の副作用があらわれやすい。 | 通常、成人は、1回量リン酸プレドニゾンナトリウムとして22mg(リン酸プレドニゾンとして20mg)を注腸投与(直腸内注入)する。なお、年齢、症状により適宜増減する。 | 潰瘍性大腸炎、限局性腸炎 |

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

| リスクの程度 の評価 | A 薬理作用 | | B 相互作用 | | C 重篤な副作用のおそれ | | C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | D 濫用の おそれ | E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ) | | F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ) | | G 使用方法(誤使用のおそれ) | | | H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化 | 用法用量 | 効能効果 |
|---------------|-----------------|--------|---|---|-----------------|--------------------------|---|--------------------------|---------------|--|---|----------------------------|--|---|--|-------------------------|---|--|---|
| | 評価の視点 | 薬理作用 | 相互作用 | | 重篤な副作用のおそれ | | 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | 薬理に基づく 習慣性 | 適応禁忌 | 慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ) | 症状の悪化 につながるお それ | 適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ) | 使用方法(誤使用のおそれ) | | | スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化 | | |
| | | | 併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ) | 併用注意 | 薬理・毒性に 基づくもの | 特異体質・ア レルギー等 によるもの | 薬理・毒性に 基づくもの | 特異体質・ア レルギー等 によるもの | | | | | | 使用量に上 限があるもの | 過量使用・誤使 用のおそれ | 長期使用に よる健康被 害のおそれ | | | |
| 鎮 痒 成分 | 塩酸ジフェン ヒドラミン | ペナ錠 | 抗ヒスタミン 作用: H1受容体 に対しヒスタミン と競合的に拮 抗すること により作用を あらわす。 ヒスタミン遊 離抑制作用 | アルコール・中枢神経抑制 剤・MAO阻害剤(中枢神経抑 制作用が増強)、抗コリン作 用を有する薬剤(抗コリン作 用が増強) | | | 頻度不明(口 渇、悪心・嘔 吐、下痢、め まい、倦怠 感、神経過 敏、頭痛、眼 気) 自動車の運 転等危険を 伴う機械の 操作 | 頻度不明(過 敏症) | | 膵内腫(悪化)、前 立腺肥大等下部 尿路に閉塞性疾 患(悪化) | 授乳中の婦人、未 熟児、新生児、妊 婦又は妊娠してい る可能性のある婦 人、高齢者 | | | | | | | 塩酸ジフェンヒドラミンとし て、通常成人1回30~ 50mg(3~5錠)を1日2~3 回経口投与する。 なお、年齢、症状により適 宜増減する。 | 痔瘻、皮膚 疾患に伴うそう 痒(湿疹、皮膚 炎)、結核熱、 アレルギー性 鼻炎、血管運 動性鼻炎、急 性鼻炎、春季 カタルに伴うそ う痒 |
| 鎮 痒 成分 | クロタミン | オイラックス | 本剤は抗ヒス タミン作用を 示さないこと 、またヒトの皮 膚感覚のうち そう痒感を抑 制するが、他 の皮膚感覚 には影響を 与えないこと などから、抗ヒ スタミン剤、 局所麻酔剤と は作用機序 を異にすると 考えられる。 一般には、皮 膚に軽いしゃ く熱感を与 え、温覚に対 するこの刺激 が競合的に そう痒感を消 失させるとい われている。 | | | | 0.1~5%未満 (熱感・しゃく 熱感、刺激症 状(ピリピリ 感、ひりひり 感等)、発 赤、発赤増 強・紅斑増 悪、分泌物増 加、浸潤傾 向) | 5%以上(過敏 症) | | 本剤に対して過敏 症の既往歴 | 高齢者・妊婦又は 妊娠の可能性の ある婦人への大量 又は長期にわたる 広範囲の使用、乳 児・小児に対する 広範囲の使用 | | 炎症症状が 強い渗出性 の皮膚炎・適 切な外用剤 の使用でそ の炎症が軽 減後もかゆ みが残る場 合に使用する。 | ・腫あるいは腫 脹周囲及び粘膜 には使用しない。 ・塗布直後、軽い 熱感を生じるこ とがあるが、通常 短時間のうちに 消失する。 | 高齢者、妊婦 又は妊娠して いる可能性 のある婦人 には、大量・ 長期にわた る広範囲の 作用は避け る | | 通常、症状により適量を1 日数回患部に塗布又は塗 擦する。 ・高齢者・妊婦又は妊娠の 可能性のある婦人：大量 かつ広範囲の使用は避け る。 | 湿疹、蕁麻疹、 神経皮膚炎、 皮膚そう痒症、 小児ストロフル ス | |

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

| リスクの程度 の評価 | A 薬理作用 | B 相互作用 | | C 重篤な副作用のおそれ | | C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ | D 濫用のお それ | E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ) | F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ) | G 使用方法(誤使用のおそれ) | H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化 | 用法用量 | 効能効果 | | | |
|------------------|---------------------------------|--|---|--|---|---|---|--|---|---|--|--|--|--------------------------|--|--|
| | | 薬理作用 | 相互作用 | 重篤な副作用のおそれ | 重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ | 薬理に基づく 習慣性 | 適応禁忌 | 慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ) | 症状の悪化 につながるお それ | 適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ) | 使用方法(誤使用のおそれ) | | | スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化 | | |
| 評価の視点 | | 併用禁忌(他 剤との併用によ り重大な問題 が発生するお それ) | 併用注意 | 薬理・毒性に 基づくもの | 特異体質・ア レルギー等 によるもの | 薬理・毒性に 基づくもの | 特異体質・ア レルギー等 によるもの | | | | 使用量に上 限があるもの | 過量使用・誤使 用のおそれ | 長期使用に よる健康被害 のおそれ | | | |
| | α-マレイン酸 クロルフェニ ラミン 2mg | 抗ヒスタミン 作用 | | 中枢神経抑制剤・アルコー ル・MAO阻害剤・抗コリン作 用を有する薬剤(相互に作用 を増強)、ドロキシドパ、ノル エピネフリン(血圧の異常上 昇) | 痙攣・錯乱・ 再生不良性 貧血・無顆粒 球症(頻度不 明) | ショック(頻度 不明) | 5%以上又は 頻度不明(鎮 静、神経過 敏、頭痛、無 線感、複視、 眠気、不眠、 めまい、耳 鳴、前庭障 害、多幸症、 情緒不安、ヒ ステリー、痙 攣、神経炎、 協調異常、感 覚異常、霧 視、口渇、胸 やけ、食欲不 振、悪心、嘔 吐、腹痛、便 秘、下痢、頻 尿、排尿困 難、尿閉等低 血圧、心悸亢 進、頻脈、期 外収縮、鼻及 び気道の乾 燥、気管分泌 液の粘性化、 喘鳴、鼻閉、 溶血性貧血、 肝機能障害 (AST(GOT)・ ALT(GPT)・ Al-Pの上昇 等)、悪寒、 発汗異常、虚 労感、胸痛、 月経異常、 0.1%未満 (血小板減 少)、眠気を 催すことが あるので自動 車の運転等 危険を伴う機 械の操作 | | | | | | | | α-マレイン酸クロルフェニ ラミンとして、通常、成人に は1回2mgを1日1~4回経 口投与する。なお、年齢、 症状により適宜増減する。 | じん麻疹、血 管運動性浮 腫、枯草熱、皮 膚疾患に伴う そう痒(湿疹・ 皮膚炎、皮膚 そう痒症、薬 疹)、アレルギー 性鼻炎、 血管運動性鼻 炎、感冒等上 気道炎に伴う しゃみ・鼻汁 ... |
| 止 血 成 分 | 塩酸テトラヒ ドロゾリン | ABCスプレ ー 点鼻薬、塩 酸塩がなく、 硝酸塩 | 直接高所粘 膜に適用す れば粘膜の 充血、腫脹を 除去する。 血圧上昇作 用はエピネフ リンと類似で あり、作用の 発現はエピネ フリンより遅 い。 | モノアミン酸化 酵素阻害剤 (急激な血圧 上昇) | | 頻度不明(結 膜、頭痛、め まい、痙攣、 不眠症、脱力 感、血圧上 昇、心悸亢 進、不整脈、 熱感、刺激 痛、乾燥感、 反応性充血、 鼻漏、長期使 用で反応性の 低下等) | 頻度不明(過 敏症) | ・本剤に対し過敏 症の既往歴 ・2歳未満の幼児 ・乳児(全身症状) ・モノアミン酸化酵 素阻害剤を投与中 (急激な血圧上昇) | 冠動脈疾患、高血 圧症、甲状腺機 能亢進症、糖尿病、 妊婦又は妊婦して いる可能性のある 婦人、小児 | | 適用又は頻回使 用により反応性の 低下や局所粘 膜の二次充血を 起こすことある。 小児において、 過量投与により、 発汗、徐脈、昏 睡等の全身症状 があらわれやす い。 眼科用として使 用しないこと。 | 適用又は頻回使 用により反応性の 低下や局所粘 膜の二次充血を 起こすことある。 小児において、 過量投与により、 発汗、徐脈、昏 睡等の全身症状 があらわれやす い。 眼科用として使 用しないこと。 | 本剤は原則として6歳以 上の小児及び成人に用い る。 通常、成人3~5時間毎に2 ~3回鼻腔内に噴霧する か、又は2~4滴を鼻腔内 に点鼻する。 なお、年齢、症状により適 宜増減する。 | 上気道の腫疾 患の充血・うっ 血 | | |

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

| リスクの程度 の評価 | A 薬理作用 | B 相互作用 | C 重篤な副作用のおそれ | C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | D 濫用のおそれ | E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ) | F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ) | G 使用方法(誤使用のおそれ) | H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化 | I 用法用量 | J 効能効果 | | | |
|---------------|---------------|--|---|---|--------------------------|---|---------------------------------|-----------------------|---|--|--|---|---|---|
| 評価の視点 | 薬理作用 | 相互作用 | 重篤な副作用のおそれ | 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | 薬理に基づく 習慣性 | 適応禁忌 | 慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ) | 症状の悪化 につながるお それ | 適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ) | 使用方法(誤使用のおそれ) | スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化 | 用法用量 | 効能効果 | |
| | | 併用禁忌(他 剤との併用により 重大な問題 が発生する おそれ) | 併用注意 | 薬理・毒性に 基づくもの | 特異体質・ア レルギー等 によるもの | 薬理・毒性に 基づくもの | 特異体質・ア レルギー等 によるもの | | | 使用量に上 限があるもの | 過量使用・誤使 用のおそれ | 長期使用に よる健康被 害のおそれ | | |
| 止血成分 | 塩酸ナファゾリン | 0.05%プリピナ液「テバ」、塩酸塩なく硝酸塩 | 血管平滑筋のα-アドレナリン受容体に直接作用して血管を収縮させる。アドレナリンより強い末梢血管収縮作用を有し、作用持続時間も長い(ウサギ耳殻血管)。 | MAO阻害薬(急激な血圧上昇) | | 頻度不明(眼気等の鎮静作用(特に小児)、神経過敏、頭痛、めまい、不眠症、血圧上昇、悪心・嘔吐、熱感、刺激感、乾燥感、嗅覚消失、反応性充血、長期投与で顆粒球減少・反応性の低下) | 頻度不明(過敏症) | | 本剤の成分に対し過敏症の既往歴(2歳未満の乳・幼児(ショック))、MAO阻害剤の投与を受けている(急激な血圧上昇) | 冠動脈疾患、高血圧症、甲状腺機能亢進症、糖尿病、交感神経作用薬による不眠・めまいなどの既往、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、小児 | 適応又は頻回使用により反応性の低下や馬所粘膜の二次充血を起すことであるので、急性充血前に限って使用するか又は適切な休薬期間をおいて使用する。 | 眼科用として使用しないこと。過量投与により、主な全身作用として、血圧上昇と二次作用として、顆粒球減少がみられる。幼・小児では過量投与により、顕著な鎮静があらわれ、発汗、徐脈、昏睡等の全身症状があらわれやすい。適応・頻回投与により顆粒球減少、反応性の低下、馬所粘膜の二次充血を起すことがある。 | 通常、成人鼻腔内には、1回2～4滴を1日数回、咽喉・喉頭には1回1～2mLを1日数回塗布又は噴霧する。なお、年齢、症状により適宜増減する。局所麻酔剤への添加には、局所麻酔剤1mLあたり0.05%液2～4滴の割合で添加する。 | 上記の諸疾患の充血・うっ血、上気道粘膜の表面麻酔時における局所麻酔剤の効力持続時間の延長 |
| | d-塩酸メチルエフェドリン | d-塩酸メチルエフェドリン散 | アドレナリン作動性の気管支拡張作用と中枢性鎮咳作用を示す。 | MAO阻害剤・甲状腺製剤(作用が増強)、キサンチン誘導体・ステロイド剤・利尿剤(血清カリウム値が低下) | β2刺激剤により重篤な血清カリウム値の低下 | 頻度不明(熱感)、0.1～5%未満(心悸亢進、顔面蒼白等、頭痛、不眠、めまい、眼気、神経過敏、疲労等、悪心、食欲不振、腹部膨満感等、口渇) | 頻度不明(過敏症) | | カテコールアミン製剤を投与中(不整脈、場合によっては心停止を起すおそれ) | 甲状腺機能亢進症、高血圧症、心疾患、糖尿病、高齢者、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、授乳中の婦人、小児等、重症喘息(血清カリウム低下) | 適度に使用を続けた場合、不整脈、場合によっては心停止を起すおそれがある | | d-塩酸メチルエフェドリンとして、通常成人1回25～50mgを1日3回経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。一般に高齢者では生理機能が低下しているため減量するなど注意すること。 | 下気疾患に伴う咳嗽、気管支喘息、感冒、急性気管支炎、慢性気管支炎、肺結核、上気道炎(咽喉頭炎、鼻カタル)、蕁麻疹、湿疹 |
| | 酸化亜鉛 | 酸化亜鉛「エビス」 | 皮膚のたん白質と結合して被膜を形成し、取れん、消炎、保護並びに緩和な防腐作用を現す。また、滲出液の吸収及び分泌抑制により、創面又は潰瘍面などを乾燥させる。 | | | 頻度不明(発疹、刺激感) | 頻度不明(過敏症) | | 本剤に対し過敏症の既往歴のある患者 | 重度または広範囲の熱傷・患部が湿潤している場所(組織修復を遅延)・患部が湿潤している場所(組織修復を遅延) | 顔には使用しないこと。吸入しない。 | | 外用散剤(散布剤)として15～100%、軟膏剤・液剤(懸濁剤・リニメント剤・ローション剤等)として2～60%上記濃度に調製し、いずれも症状に応じ1日1～数回患部に適用する。 | 効能・効果軽度の皮膚病変の取れん・消炎・保護・緩和な防腐 |

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

| リスクの程度 の評価 | A 薬理作用 | B 相互作用 | | C 重篤な副作用のおそれ | | C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ | D 濫用のお それ | E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ) | | F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ) | | G 使用方法(誤使用のおそれ) | | | H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化 | I スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化 | 用法用量 | 効能効果 |
|------------------|------------------------|--|--|-----------------|--------------------------|-----------------------------|--------------------------|---------------------------------------|--|-------------------------------|------|-------------------------------------|-----------------------|--|--------------------------------|--------------------------------|--|------|
| | | 薬理作用 | 相互作用 | | 重篤な副作用のおそれ | | | 重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ | | 薬理に基づく 習慣性 | 適応禁忌 | 慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ) | 症状の悪化 につながるお それ | 適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ) | | | | |
| 評価の視点 | 薬理作用 | 併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ) | 併用注意 | 薬理・毒性に 基づくもの | 特異体質・ア レルギー等 によるもの | 薬理・毒性に 基づくもの | 特異体質・ア レルギー等 によるもの | | | | | | 使用量に上 限があるもの | 適量使用・誤使 用のおそれ | 長期使用に よる健康被害 のおそれ | | | |
| 抗 菌 成 分 | イソプロピル メチルフェ ノール | フェノール 薬科用では ない | 本剤は、使用 濃度において グラム陽性 菌、グラム陰 性菌、結核菌 には有効であ るが、芽胞 (炭疽菌等)及 び大部分の ウイルスに対 する効果は期 待できない。 | | | | 頻度不明(過 敏症) | | | ・損傷皮膚及び粘 膜(吸収され中毒 症状発現) | | | | ・原液または濃 揮液が皮膚に付 着した場合には 腐蝕及び吸収さ れ、中毒症状を 起こすことがあ る。眼に入らない ように注意する こと。本剤は必ず 希釈し、濃度に 注意して使用す ること。炎症ま たは過剰刺激性 の部位に使用す る場合は、濃度 に注意して正常 の部位に使用す るよりも低濃度と することが望まし い。 ・外用にのみ使 用すること。 ・密封包装、ギブ ス包装、パックに 使用すると刺激 症状及び吸収さ れ、中毒症状が あらわれるおそ れがあるので、 使用しないこ と。・長期間また は広範囲に使用 しないこと。[吸 収され、中毒症 状を起こすおそ れがある。]-誤 飲を避けるため 、保管及び取扱い には十分注意す ること。 | | | 効能・効果 用法・用量(本 品希釈倍数) ・手指・皮膚の消毒:フェ ノールとして1.5~2%溶液 を用いる。(50~67倍) ・医療用具、手術室・病室 ・家具・器具・物品などの消 毒:フェノールとして2~ 5%溶液を用いる。(20~ 50倍) 排泄物の消毒:フェノール として3~5%溶液を用い る。(20~33倍) 下記疾患の鎮痒 痒疹(小児ストロフルスを 含む)、じん麻疹、虫さされ 液: フェノールとして1~2%溶 液を用いる。(50~100倍) 軟膏:フェノールとして2~ 5%軟膏を用いる。(20~ 50倍) | |

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

| リスクの程度 の評価 | A 薬理作用 | B 相互作用 | | C 重篤な副作用のおそれ | | C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | D 濫用のおそれ | E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ) | | F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ) | | G 使用方法(誤使用のおそれ) | | | H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化 | 用法用量 | 効能効果 |
|---------------|---------------------------------|---|------------------------------|--------------|-----------------|-------------------------|-------------|---------------------------------|---------------------------------------|---|------------------------|------------------|--|--------------------------|--|--|--|------|
| | | 薬理作用 | 相互作用 | 重篤な副作用のおそれ | 重篤ではないが、注意すべきもの | 薬理に基づく習慣性 | 適応禁忌 | 慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ) | 症状の悪化 につながるお それ | 適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ) | 使用方法(誤使用のおそれ) | 過量使用・誤使 用のおそれ | 長期使用に よる健康被害 のおそれ | スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化 | | | | |
| 抗菌成分 | 塩酸クロルヘキシジン 5%ピピテン液、グルコン酸塩を使用 | 抗菌作用: グラム陽性菌には低濃度でも迅速な殺菌作用を示す。グラム陰性菌には比較的低濃度で殺菌作用を示すが、グラム陽性菌に比べ抗菌力が幅がみられる。芽胞形成菌の芽胞には効力を示さない。結核菌に対して水溶液では静菌作用を示し、アルコール溶液では迅速な殺菌作用を示す。真菌類の多くに抗菌力を示すが、全般的に細菌類よりも抗菌力は弱い。ウイルスに対する効力は確定していない。 作用機序は十分には解明されていないが、比較的低濃度では細菌の細胞膜に障害を与え、細胞質成分の不可逆的漏出や酵素阻害を起こし、比較的高濃度では細胞内の蛋白質や核酸の沈着を起こすことが報告されている。 | 併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ) | 併用注意 | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | 0.1%未満(過敏症) | | アレルギー性皮膚炎の既往歴、喘息等のアレルギー疾患の既往歴、家族歴 | | | | 外用にのみ使用する 眼に入らないよう注意する。産婦人科用(膣・外陰部)、泌尿器科(膀胱・外生殖器)には使用しないこと。創傷部位に使用する希釈液は調製後減菌する。本剤は必ず希釈し温度に注意して使用 | | | ①0.1~0.5%水溶液(本剤の50倍~10倍希釈)(通常時:0.1%水溶液(30秒以上) 汚染時:0.5%水溶液(30秒以上)) ②0.1~0.5%水溶液(本剤の50倍~10倍希釈)又は0.5%エタノール溶液(本剤の10倍希釈)(0.5%エタノール溶液)(30.05%水溶液(本剤の100倍希釈)(0.05%水溶液)) ③0.1~0.5%水溶液(本剤の50倍~10倍希釈)又は0.5%エタノール溶液(本剤の10倍希釈)(通常時:0.1%水溶液(10~30分) 汚染時:0.5%水溶液(30分以上)) ④0.5%エタノール溶液(2分以上) ⑤0.05%水溶液(本剤の100倍希釈)(0.05%水溶液) | 本品は下記の濃度(グルコン酸クロルヘキシジンとして)に希釈し、水溶液又はエタノール溶液として使用する。 効能・効果 用法・用量 (使用例) ①手指・皮膚の消毒 ②手術部位(手術野)の皮膚の消毒 ③皮膚の創傷部位の消毒 ④医療用具の消毒 ⑤手術室・病室・家具・器具・物品等の消毒 | |
| セトリミド | なし | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 創傷治癒促進成分 | アラントイン | なし | | | | | | | | | | | | | | | | |

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

| リスクの程度 の評価 | A 薬理作用 | B 相互作用 | | C 重篤な副作用のおそれ | | C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ | | D 濫用のお それ | E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ) | | F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ) | | G 使用方法(誤使用のおそれ) | | | H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化 | | |
|----------------------------|---------------|----------------|--|--------------|-----------------|-----------------------------|---|--------------------------|---------------------------------------|------|-------------------------------------|-----------------------|---|------------------|--|--------------------------------|--|--|
| | | 薬理作用 | 相互作用 | | 重篤な副作用のおそれ | | 重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ | | 薬理に基づく 習慣性 | 適応禁忌 | 慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ) | 症状の悪化 につながるお それ | 適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ) | 使用方法(誤使用のおそれ) | | | | |
| 評価の視点 | | | 併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ) | 併用注意 | 薬理・毒性に 基づくもの | 特異体質・ア レルギー等 によるもの | 薬理・毒性に 基づくもの | 特異体質・ア レルギー等 によるもの | | | | | 使用量に上 限があるもの | 過量使用・誤使 用のおそれ | 長期使用に よる健康被 害のおそれ | スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化 | 用法用量 | 効能効果 |
| 血 行 改 善 成 分 | 酢酸トコフェ ロール | ビタミンE:ユ ベラ錠 | | | | | 0.1~5%未 満(便秘、胃 部不快感)、 0.1%未満 (下痢) | 0.1%未満 (過敏症) | | | | | | | 末梢循環障 害や過酸化 脂質の増加 防止の効能 に対して、効 薬がないの に月余にわ たつて温然と 使用すべき ではない。 | | 錠 剤 通常、成人には1回1~2 錠(酢酸トコフェロールとし て、50~100mg)を、1日2 ~3回経口投与する。 なお、年齢、症状により適 宜増減する。 | 1. ビタミンE欠 乏症の予防及 び治療 2. 末梢循環障 害(間歇性跛行 症、動脈硬化 症、血栓性静 脈炎、糖尿病 性網膜症、凍 瘡、四肢冷感 症) 3. 過酸化脂質 の増加防止 |